

佐保台小5年生 田植え実習・報告

09年に始まった佐保台小5年生たちの稲作体験学習は、7年目を迎えました。梅雨前線の動きが気かりであったが、前日に通り過ぎてくれたので、絶好の日和となった6月4日(木)、予定通りに14名がチャレンジしてくれました。

午前10時に14名の元気っ子たちの声が、ならやまにこだま。藤田会長から歓迎と励ましの挨拶があり、サポーターの会員さんを紹介、子供たちからは、「よろしくお願ひします。」と力強い言葉が返されました。

水田に一步踏み入れた途端に、一斉に「きゃー」と大声。次の一步は勿論のこと回れ右もままならない。会員の皆さんに励まされ、田植えができる姿勢に落ち着く。苗の持ち方や植え方の手ほどきを受け、田植え縄の目印を目標に、「よし!」のかけ声に合わせて、14人が息を合わせつつ一列次の一列と植え付けていく。初めは戸惑いがちであったが、次第に手つきや足取りも慣れ、手際よく田植えが進み、一人当たり約100株の植え付けにチャレンジ。田の神様に豊作を祈願して約1時間で完了。



手足を綺麗にした後、ペタキン池で「ザリガニ」などを観察、中でも圧巻は体長約3~4cmにもなるかという「バラタナゴ(通称・ペタキン)」の観察ができたことであった。

緑陰広場で講評を聞く時、達成感に満ちた表情を浮かべていたのが印象的でありました。

今年の5年生は、上手に植え付けてくれました。収穫量も多くなるのではと期待しています。

(鈴木末一)



出雲学事始め

歴史文化クラブは、このたび「歴史の渚を歩く」シリーズの特別企画として、古代史上の謎の国といわれる出雲を訪ねた。

記紀をひもとけば、大和と出雲との間に一方ならぬ因縁を感じる。初期ヤマト王権の中心的な三輪山の主は大国主命とされ、大和の各地にも出雲系の神々の影が色濃く残る。神話の世界でも、主役に準じた役回りである。

出雲行きが決まった1月、世話人6人による出雲委員会で勉強を開始、出雲学事始めである。時は出雲ブームなのか、大阪で開かれた島根大学の古代出雲文化フォーラムには2000人の歴史ファンが詰めかけ、近つ飛鳥博物館の「古代出雲とヤマト王権」と題する4回の講演会は全て満員。メンバーは理解力、記憶力の衰えを痛感しながらも資料を漁り講演を聞き議論した。

初めて読む出雲国風土記は特に興味をひく。出雲生え抜きの国造が編纂したこの書は、記紀に語られない伝承や出雲の神々が活躍する。8世紀大和朝廷に屈しながらも、出雲固有の歴史・文化を守る姿勢が窺われ、記紀と対比してみると非常に面白い。

ご指導いただいた岩本先生でも「古代出雲はようわからん」と仰る。神話や伝承の豊かな割に、裏付けとなる史実、考古学資料が少ない為か、種々の本はあるが定説がないのだ。最近の神庭荒神谷遺跡や、加茂岩倉遺跡の大発見を切っ掛けに、出雲研究が盛んになっている。出雲学の今後の進展が待たれる。

かくて、まことに不完全ながら手作りの資料が完成し、晴れて歴史の渚への道行がはじまった。旅の詳細は、レポートに譲るが、一番楽しんだのは出雲委員会のメンバー自身であったことは間違いない。

(歴文クラブ 古川祐司)